

会話データ分析の教育者・研究者による語りから広げる研究と実践の視野

ーグループ・ディスカッションを通してー

企画責任者：中井陽子(東京外国語大学)

話題提供者：寅丸真澄(早稲田大学) 大場美和子(昭和女子大学)

1. ワークショップ趣旨説明 (中井)

我々が自身の研究をどのように発展させ、研究成果を社会に貢献させていくかといった「研究と実践の連携」のあり方を考えていくことが今後の社会に求められる(中井2012)。「研究と実践の連携」のあり方を考える際、これまで研究に多大な功績を残しつつ、実際に「研究と実践の連携」を行い、社会的貢献をしてきた先達の軌跡を知ることによって自身が今後進むべきヒントが得られることがある。

そこで、本ワークショップでは、まず、会話データ分析の研究成果を社会的貢献につなげてきた教育者・研究者の功績を例として取り上げ、その「研究と実践の連携」の語りを紹介する。それを踏まえ、フロア参加者がグループになり、今後の自身の研究や実践で参考にしたい点などについてディスカッションを行い、フロア参加者の視野の広がりを試みる。

さらに、同語りをまとめた教材を学部生が読み、どのようなことを学び、視野を広げていたか報告し、フロア参加者のさらなる視野の広がりをねらう。また、学部の授業でこうした語りを扱う効果についても議論する。

最後に、同語りから得られた会話データ分析の活用例について、「会話データ分析とその研究成果の活用」モデル(中井他2017)に沿って紹介する。これをもとに、再度、グループ・ディスカッションを行い、フロア参加者自身の研究と実践の位置づけを問い直し、さらなる視野の広がりを目指す。

本ワークショップの構成と内容は、以下の通りである。

1. ワークショップ趣旨説明	5分	中井
2. 会話データ分析の「研究と実践の連携」に関する語りの収集方法	5分	寅丸
3. 会話データ分析の「研究と実践の連携」に関する語りの紹介		
3.1 日本人女性 JF 氏の語りの報告	10分	寅丸
3.2 韓国人女性 KF 氏の語りの報告	10分	大場
3.3 日本人男性 JM 氏の語りの報告	10分	中井
3.4 フロア参加者のグループ・ディスカッション&全体討論	60分	
4. 学部生の学びの分析	10分	中井
5. 「会話データ分析とその研究成果の活用」モデル	5分	大場
概要説明&フロア参加者のグループ・ディスカッション	20分	
6. 全体討論・まとめ	15分	中井

以上により、本ワークショップでは、フロア参加者がこれまでの先達の研究とその成果の活用の功績を知り、さらに学部生といった若手の視点にも触れ、それらと自身の研究と実践を照らし合わせる。そして、理論研究や実践研究などを行う様々な分野のフロア参加者がグループ・ディスカッションを通して、互いの共通点・相違点を議論することで、個人レベルでは気付きにくい、俯瞰的な観点から自身の研究と実践の立ち位置を考える場を提供する。こうした参加型のワークショップにより、今後の研究と実践のつながりについて、世代間、分野間といった縦と横へ視野が広がり、今後の活動の可能性を広げられることを目指す。

2. 会話データ分析の「研究と実践の連携」に関する語りの収集方法 (寅丸)

会話データ分析の「研究と実践の連携」に関する語りは、2012年から2015年にかけて、日本、米国、豪州、韓国などの国内外で長年会話データ分析を行ってきた教育者・研究者12名を対象にインタビューの形式によって収集した。語りの収集目的は、会話データ分析とその研究成果の活用方法の具体例を得て、その「研究と実践の連携」について、様々な

分野の教育者・研究者と共有・議論することであった。

インタビューは、それぞれ2時間程度行った。また、インタビューでは、対象者の研究と実践のこれまでの軌跡、および、どのような研究を行い、それらをどのように実践に役立ててきたのかという「研究と実践の連携」の具体的なありようを語ってもらった。そして、インタビューでの語りはすべて録音・文字化し、語りの流れや内容を整えた後、インタビューでの対話の形式で中井他(2017)にまとめた。本ワークショップでは、このようにして収集された語りの中から、以下、日本、韓国、米国で研究と実践を行ってきた3名の語りを取り上げ、「研究と実践の連携」に関する語りの要点を簡潔にまとめる。

3. 会話データ分析の「研究と実践の連携」に関する語りの紹介

日本、韓国、米国で教育を行いつつ、各分野で会話データ分析に関連する研究を行ってきた、以下3名の語りを報告する。

3.1 日本人女性 JF 氏の語りの報告 (寅丸)

JF 氏は、1950 年代、国内大学の英米文学科在学中に日本語学校の夏期日本語講師養成講座を受講したのをきっかけに日本語教育の世界に入った。大学院では英米文学を専攻したが、大学院在学中に他大学の日本語講座の助手となり、初級から上級の日本語教育を経験する。ここでは、日本語教科書の作成に参加したことにより、教育実践を行いつつ、その現場で必要とされる教材を作っていくという「研究と実践の連携」に対する姿勢が確立されていった。以後、JF 氏は、実践を軸に据えながらも、実践に役立つ研究を旺盛に行い、その研究成果を数々の発表や論文、あるいは教科書や文法説明書として発信していく。また、実践の場を国内のみならず海外にも拡大し、フランスやアメリカの高等教育機関における日本語教育の普及に貢献している。さらに、このような日本語教育の研究者、および実践者(教育者)としての知見を活かし、日本語教師養成の分野において、後進の指導にあたっている。JF 氏は、日本語教育の先駆者として日本語教育の発展を支え伴走してきた研究者であり実践者であると言える。そのような JF 氏の語りで特徴的なのは、学習者の学習を知的、心理的な両面において支援しようとする日本語教師観や、「研究と実践の連携」の深さ、研究者や実践者として知りえた知見を社会全体で共有しようとする視野の広さの3点であると考えられる。

まず、1つ目の特徴である日本語教師観について、JF 氏は教育者としての専門性と知識の必要性のみならず、学習者の能力を引き出すことや、そのために学習者を否定しないことの重要性、すなわち学習者の精神面にも配慮すること、および学習者の視点に立って実践を行うことの大切さを指摘している。育成すべき日本語教師の人物像について、日本語教育に関わる知識とそれらを説明できる力、教材作成能力の必要性を挙げているが、「学習者の身になって考えられる」ことも重要であり、日本語教師は学習者を励まし支えるべき立場にあることを指摘している。研究者である以前に教育者であり、教育者として学習者が学習しやすい最善の環境を提供しようという姿勢が見られる。

次に、JF 氏の語りの2つ目の特徴は、「研究と実践の連携」の深さである。JF 氏は、自らの研究の源泉は学習者の質問であったと語っている。学習者の質問に対して適切に答えられない諸問題が研究課題になり、ひいては教材開発につながっていったと言う。例えば、JF 氏は、文法研究なども十分になされていない時代環境の中、手探りで授業準備を行って実践に臨んでいたが、必ずしも期待通りに学習者の習得が進まないことがあった。そのような時、教師は学習者の習得を阻む原因を解明し、それを解決するための教材や教授法を作成しなければならない。例えば、初級後半の学習項目である「ト、バ、タラ、ナラ」の条件節もその一つであった。学習者が条件節などの複文の習得に困難を抱えているのではないかという問題意識を持った JF 氏は、複文の文法研究の観点から、条件節の研究を始めた。以後、条件節の研究は JF 氏の主要な研究の一つとなり、その研究成果は再び実践に還元されていった。そして、研究成果の還元にあたっては、学習者にとって習得が困難な条件節をどのような順番で教えていけばよりよい効果が期待できるのかという、実践に直結した文法の提示順序についても研究を重ねている。さらに、実践への応用可能性を追究していく過程で、談話レベルの文法研究の重要性を認識することにもなった。このように、実践から生まれた問題を解決するために研究を行い、その研究成果を自身や他者の実践、教材開発などに活かすという姿勢は、JF 氏の「研究と実践の連携」の深さを物語っている。JF 氏にとって、研究と実践は分かちがたい一体のものであると言える。

さらに、3つ目の特徴として挙げられるのは、研究者や実践者として知りえた知見を社会全体で共有しようとする視野の広さである。JF 氏は、実践の知見や研究成果を他の研究者や実践者と広く共有することによって、社会に貢献すべきであると語っている。JF 氏は、発表や論文、教科書や文法説明書などを通して、自身の実践や研究を日本国内のみならず、世界の研究者や実践者に広め、日本語教育全体の反映と学習者の育成に寄与していたと言える。

以上、JF氏は日本語教育の実践者として現場で研鑽を積むうち、実践から生まれた問題を解決すべく研究の世界に入り、そこでの知見や成果を自身の実践や研究、ひいては他の研究者や実践者と共有することを通して、「社会は世界」という語りから推測できるように、国内外において社会貢献していたと考えられる。さらに、「研究したら即実践」という語りや物語るように、「研究と実践の連携」を日本語教育初期の時代から体現し、その成果を世界に発信し、次世代に活躍する実践者や研究者の一つの貴重なモデルとなった影響力と功績もまたきわめて大きいと考えられる。

3.2 韓国女性KF氏の語りの報告（大場）

KF氏は、1970年代に韓国の大学の日語学科を卒業し、文部省招聘国費留学生として日本の大学院に進学し、日韓の敬語の歴史的な研究を行う。当時は博士号の取得が非常に難しかった時代であり、一度帰国して韓国の大学で日本語を教えながら研究を継続する。そして、17世紀に朝鮮で編纂された日本語の教科書中の敬語の研究で博士論文を執筆し、日本の大学院で博士号を取得する。この日韓の敬語の研究を行う過程において、現代の日本語と韓国語を談話レベルで見直すことへと関心が広がっていく。そして、それらの研究成果を、日韓のコミュニケーションに関する書籍、日本語の教科書、研究叢書の出版やテレビの語学講座の担当などの形によって、日韓両国の研究者から広く一般市民にも分かりやすく発信してきた点が大きな特徴として指摘できる。以下、この研究成果の発信に特に着目して述べる。

KF氏の博士論文は日韓の敬語の歴史的な研究であるが、現代の敬語にも関心が向いていくこととなる。特に、日本に留学した際、実際の場面で日本語のやりとりを体験することによって、主に人間関係と言語形式を中心に分析するだけでなく、談話レベルで多様な要因を考慮しながらやりとりの実態を見ることへ関心が出てくる。例えば、韓国語では年上の人に必ず敬語を用いるため、日本の市場でも年上の店員に対して「～していただけませんか」と話しかけたところ、市場ではそのような言い方はしないと知人に指摘されて衝撃を受ける。つまり、日韓で場面の捉え方が異なるため、やりとりのしかたも異なるということに気付き、韓国語の発想で日本語を使用するのではなく、日韓の「文化の違い」を意識する重要性を認識するようになる。この日韓の文化の違いについては、他の既存の日本語の教科書に紹介もあるものの、どちらかと言えば「日本の三大祭り、七五三」といった文化の知識の紹介になってしまう傾向にある点を問題視している。このような文化の知識もふまえて、学習者がある場面で適切にやりとりを行えるようにするという意味での文化の違いを理解することが重要であると考えている。また、テレビの日本語講座を担当して教えるということを経験したことも、後に言語行動や文化について教育に取り入れたり、談話研究を行う必要性を感じたりするきっかけにもなった。

こういった経験をふまえて、現代語の敬語をはじめとする現代の日韓の言語行動の研究では、当時、データとしてよく使用されていたドラマの分析を行った。また、日韓でリメイクされた映画をデータとすることで、同じ場面で使用される表現の違いについても分析を行った。これらの成果を、ドラマから日韓の言語行動を学べる書籍としてまとめ、韓国で出版する。この出版に、KF氏の大学時からの恩師である韓国語の日本人研究者が関心を持ち、日本での出版にもつながる。他にも、韓国語の敬語や日韓のコミュニケーションに関する書籍を数多く出版するなど、日韓の両国において異文化理解につながる研究成果の発信を行ってきている。こうした研究を行う過程で、指導した学生の中には、ドラマの会話データを活用して研究を行った者もいた。

また、日本留学中に、場面の捉え方の違いを文化の違いの1つとして意識した経験は、教科書の執筆にも活かされている。韓国の高校の日本語の教科書の執筆では、言葉が使われている場面を高校生にも理解してもらえるように、4コマか8コマの漫画を使って場面の状況を視覚的に分かりやすく説明するような試みを行っている。また、コラムで、あいづち、断り、ほめなど、日本語のコミュニケーションの特徴について読者の理解に役立つ内容を書いたとのことである。

こうした日韓の文化の違いの重要性を意識した研究成果をまとめ、広く一般の多くの人にもやさしく日本の文化を理解してもらえるような本を出版することを考えていた。しかし、なかなか一人ではできず、若手の研究者と話すのも好きだったので、周囲の人と編集や出版の計画について相談を行った。この結果、若手の研究者と日本文化、日本語学や日本語教育に関するアイデアを出し合って叢書の出版を企画し、200人以上の研究者がそれぞれの専門を活かして執筆するというのを成し遂げた。この叢書に取り組んでいる際、韓国における日本関連の学会の会長も務めることとなった。当時、女性が研究を行うこと自体もなかなか困難で、研究者が男性10人の中に女性は1人だけというような状況であった。役職に就くことが非常に珍しく、学会長というのは女性はやらないという時代であったため、常に緊張していた。このような役職に就きながら上記の叢書出版ができたのは多くの若い研究者のおかげであったと認識している。

そして、若い世代の研究者には、韓国語や日本語のそれぞれの言語の個別性と普遍性について考えていくことを期待している。両言語には共通点も多く理解しやすい部分もあるものの、もう少し視野を広げて、世界の言語の中で、その個別性と普遍性がどのような意味を持つのか考えていくことが課題であると考えている。

以上の点から、KF氏は、日韓の敬語の研究から日韓の文化の違いを強く意識して談話レベルの研究を行うようになり、

また、その研究成果を一般書、日本語の教科書、研究の叢書に至るまで多様な書籍の出版という形で「研究と実践の連携」を実践してきた点に特徴がある。また、日本留学の際の経験を通して認識した文化の違いについて、知識の紹介で終わらせるのではなく、学習者が実際の場面で適切なやりとりができることを目的として、日韓の場面の捉え方の違いを分かりやすく提示するなど、研究成果の発信の姿勢に活かされていると言える。さらに、叢書に関しては、若手の研究者と相談しながらアイデアを出し合っただけで企画し、出版につなげることとなった点においても大きな意味のある研究成果の発信であると考えられる。そして、若い研究者がKF氏に協力できたのは、研究成果を発信するKF氏の姿勢に共感する研究者が数多くいたためであるものと考えられる。つまり、KF氏の「研究と実践の連携」のプロセス自体が、後に続く研究者・教育者に大きな影響を与えたものと考えられる。

3.3 日本人男性 JM 氏の語りの報告 (中井)

JM氏は、日本の大学の英文科を卒業し、英語教師になるために、1980年代～90年代にアメリカに留学した。まず、アメリカの大学の学部では、言語学と英語教育のクラスを履修した。従来の言語学の初歩段階では、言語をある枠組みにそってパズルのように当てはめて考えていくため、言語学に興味を覚え、それから長年、この分野の研究を行うこととなった。修士課程では、教員の大半が言語学者であり、生き残っていくためにも言語学を追求していくこととした。博士課程では、まだ学位が取れていない段階で、指導教員に別のアメリカの大学の日本語教員になることを勧められ、仕事を始めた。現在は、カナダの大学で学部生・大学院生対象に、日本語、および、言語学の教育を行っている。以下、JM氏の研究内容と研究理念、および、教育内容と教育理念について述べ、さらに、会話データ分析の研究成果を日本語教育へ活かす方法に対する考えについて述べる。最後に、若手研究者育成の取り組みと理念について述べる。

研究は、文法を中心に行っている。大学院の時は言語学専攻であったため、様々な言語をデータとしていたが、日本語教師の職に就いてからは、日本語を主なデータとして研究するようになった。また、博士課程に進学した大学院には、ディスコースの研究者が集まっており、言語能力を見るためには会話データを見るしかないと教え込まれた。そのため、真に言語研究を行うなら、可能な限り多くの会話のデータを収集し、その書き起こし方法を確立して、最終的にはそれを基盤とした巨大なコーパスを作って研究するべきだという信念を持っている。特に、文法の本質的な性質を見るためには、話し言葉を見るべきだと考えている。

JM氏が担当する学部生対象の言語学の授業では、まずチョムスキーの生成文法などの伝統的な言語学の基礎を紹介し、それをもとに、学部後半から大学院で、会話データに基づく言語学の授業を取らせるようにしている。そうしなければ、会話データの分析を行う際、単なる主観的な印象を述べることに陥りがちになると考えるためである。また、現在行われている研究というものは、これまでの研究者が行ってきた研究に対するリアクションであるため、言語学を研究する際は、先人の研究を踏まえた上で、それに対するリアクションが行えるようになる必要があると考えている。JM氏の場合、チョムスキーらが述べる全ての言語構造に共通する普遍的な原理に対して、批判的に捉え、リアクションしていく姿勢を自身の大学院時代に叩き込まれた。これは、チョムスキーらの原理が自然会話には当てはまらない点を見出し、新たに、言語というものを人間同士の相互作用や機能から説明するべきだと主張する姿勢のことである。そして、自身が担当する言語学の授業でも、まずは伝統的な理論を理解させ、それに対するリアクションが適切にできるようにしている。

なお、会話データの分析結果を日本語教育にすぐに活かせるかという点は、慎重にならなければならないと考えている。それは、データを1回だけ集めてきて分析した結果の信憑性がどの程度あるか分からないからである。言語学では、多くの研究者がデータを見て議論し、概ね同意が得られた際によりやく日本語教育に使えるようになるため、何十年もかかる。研究の積み重ねのもと、慎重に教育につなげていくべきだと考えている。

さらに、若手の研究者の育成のため、ホームページやワークショップによって、会話基盤の文法研究の成果を発信したり、分析手法を紹介したりしている。大学院生のうちに、自身でデータを収集し、書き起こし、皆で共有してコーパス化するという経験を積んで欲しいと考えている。その過程から、データ収集の大変さを知ると同時に、できるだけ多くの用例に向き合うことでデータの見方が身に付いていくという信念を持っている。こうした実際の用例のデータを集めた基礎資料があつてはじめて言語学の研究が成り立つと考えている。

以上の点から、JM氏は、自身が大学院時代に培った言語学の研究姿勢・理念のもと、現在の会話データに基づいた文法研究や学部生への授業を行っていると言える。研究成果を日本語教育にすぐに結び付けることは難しいと述べる一方、自身が学生時代に培った研究理念・教育理念を自身の現在の研究や実践に結び付けようとする「研究と実践の連携」の姿勢が見て取れる。つまり、長年かけて熟成されてきた理念を自身の実践に活かそうとする強い信念が現れていると言えよう。また、日本語教育という分野で教育を行うため、研究でも日本語をデータとするようになった点も、「研究と実践の連携」の姿勢だと考えられる。

3.4 フロア参加者のグループ・ディスカッション&全体討論

フロア参加者が3~4人程度のグループを作り、JF氏、KF氏、JM氏の語りについて、以下の点からディスカッションを行い、全体で共有し、フロア参加者の視野の広がりを試みる。

- ・語りの内容で共感した点・気づいた点・重要だと思った点
- ・疑問点・より深く議論したい点
- ・今後の自分の研究や実践で参考にしたい点

4. 学部生の学びの分析（中井）

JF氏の語りに焦点を当て、学部生が授業でJF氏の語りを読み物教材としてまとめたものを読んで何を学んだかを分析する。分析対象とするのは、2017年10月~2018年1月（全13回）に実施した学部の授業において受講生がまとめたレポートの記述である。この授業は、会話データ分析の手法を学ぶことを目的とし、受講生は、全38名（学部3、4年生31名、研究生7名）、日本人学生29名と外国人留学生9名（中国7名、インドネシア2名）であった。受講生の専門は、日本語教育、日本語学のほか、その他の外国語を対象とした言語文化学などであった。

本授業では、JF氏の語りを含む、指定された数本の読み物を読んできて、以下の設問項目について3~5人程度のグループで議論し、学んだことを2~3頁のレポートにまとめる課題を課した。この課題の目的は、日本語教育の分野で研究と実践を行ってきた教育者・研究者の軌跡に触れることで、受講生が自身のキャリア形成を再考する機会とすることであった。

- ・読み物の内容の概要（語り手の経歴、要点など）
- ・共感した点・改めて気づいた点・重要だと思った点
- ・疑問点・分かりにくかった点・より深く議論したい点
- ・今後の自分のキャリア形成で参考にしたい点

これらのレポートの記述のうち、既に、JF氏以外の5名の語りについての記述を対象として、中井・高田（2017）、中井（2017, 2018）で分析を行った。本稿では、この分析方法を参考に、JF氏の語りについての記述の分析を以下の通り行った。まず、JF氏の語りからの学びだと思われる記述部分を抽出した。次に、この学びの記述を内容のまとまりごとに区分し、中井・高田（2017）、中井（2017, 2018）で学びの内容ごとに付けたタイトルに当てはまるものはそのタイトルを付け、当てはまらないものは新たなタイトルを付けて分類した。その結果、タイトルを付けた学びの総数は47であった。さらに、各タイトルの内容が近いものを1つのカテゴリーとしてまとめた。

上記の分析の結果、表1のように、JF氏の語りの読み物を読んだ受講生の学びは、6つのカテゴリー、18のタイトルに分類された。

表1 JF 氏の語りの読み物からの学部生の学び

カテゴリー	タイトル	件数	計
①研究と実践の繋げ方	研究の成果を自らの実践に活かすこと	8	18
	教える実践現場で得た経験を研究に活かすこと	4	
	研究を通して社会貢献することの重要性	2	
	研究成果をもとにした教材開発	1	
	研究と教育は一体	3	
②言語研究の内容	談話レベルの研究の重要性	4	4
③日本語教育の内容	教材の内容	1	1
④研究者の姿勢	研究を追求する姿勢	2	4
	知見の共有の重要性	2	
⑤日本語教師の姿勢・役割	教育者の専門性・知識の必要性	1	19
	学習者の視点に立って考える視点の必要性	5	
	多様なニーズをもとに研究・教育を行う	6	
	日本語母語話者教師の立ち位置	1	
	学習者の精神面のケア	3	
	学習者の能力を引き出す必要性	1	
	学習者を否定しないことの重要性	1	
	教材の整備の重要性	1	
⑥キャリア形成	世界に目を向ける重要性	1	1
		合計	47

以下、タイトル数が多かったもの、および、JF 氏の語りの内容の特徴をよく反映していると思われる学びの記述を選び（表1 網掛部）、学部生の記述例をそれぞれ抜粋して原文通り示す。

①研究と実践の繋げ方

(1) 研究の成果を自らの実践に活かすこと

記述例(1)	純粋に凄いと感じるのは「ト、バ、タラ、ナラ」の条件節に関する研究である。参考資料もなく、参考書などもほとんどない時代に、新聞の記事から例文を探してきて、自分でルールを作り、実践の場であるクラスに持って行き、説明する。そして、学生とともに試行錯誤して研究と実践を繰り返すことを毎日やっていたことは、助手としてではなく、日本語教育に大きな関心がないとできないことだと感じる。(学部生A 日本人男性)
記述例(2)	この先生のインタビューで重要であると感じたのは研究を即実践に活かしていくという話である。その例としてフランス語中級用の複文句末表現などの例文を集めて辞書的にしようとしていたが、それをフランス語に訳す人の都合がつかずにデータが古くなってしまったという話があった。このように、たった10年手元に置いておいただけでそのデータは古くなり、例文としての役割を果たさなくなってしまうというのは研究のむずかしさや、言語の移り変わりのはやさを感じ、非常に重要な点だと感じた。(学部生B 日本人男性)
記述例(3)	研究から得た成果を実際の教育現場に持ち込んで、研究を自分のためだけにするのではなく、必要とする人のために活かしていくことは、研究をするうえで大事であると感じた。(学部生C 日本人女性)
記述例(4)	研究は即実践、という先生の言葉は心に響いた。思い立ったらすぐ行動するという事は難しいことだが、後回しにしたところでなんのメリットも生まれない。すぐ行動することによって自分の理想が思った以上に早く実現するかもしれない。今後のキャリア形成において心に留めておきたい言葉だと思った。(学部生D 日本人女性)
記述例(5)	研究は即実践という点は、言語研究においてだけでなく生活の中でも普遍的に応用できることだと思います。例えば得た学びをすぐに授業や日常で活用してみたり、考えたことをすぐ行動に移したりすることです。こうしたことは人間として大切な考え方だと思うので是非心に留めておこうと思いました。(学部生E 日本人女性)

(2) 教える実践現場で得た経験を研究に活かすこと

記述例(6)	会話データ分析の研究において非常に特徴的で重要だと感じた点は、教育現場の実践が先にあつて実践からの経験を研究にして伝えるという部分です。一般的な研究体系だと研究が先に来てその実践や活用が後に来ることがほとんどだと思いますが、言語研究だと常に現場での経験が先行するのは言語研究がいかに実践と密接に関係していて、さらにJF先生が研究された当時日本語教育に関する研究が日本全体で不足していたことを表している例だと感じました。また、研究の動機やアイデアは学生の質問からという部分は言語研究（日本語教育）は研究者だけでは成り立たず常に学習者の存在が必要不可欠であることを示しており、それは日本語教育において非常に顕著な特徴であると思います。（学部生E 日本人女性）
--------	---

(3) 研究を通して社会貢献することの重要性

記述例(7)	ご自身の研究の社会貢献に対しては「まあ、活動することがある種の貢献にはなっているんじゃないですかね。」と述べています。自身の研究や作成した教科書が誰かのためになり結果社会に貢献できるというのは非常にやりがいのある研究だと感じました。（学部生E 日本人女性）
記述例(8)	JF先生の、研究したら即実践、という連携は普段の実践の中で学習者の言語使用や質問を注意深く観察しているからこそとれているものであると思う。自分でも卒論などの研究活動を行うにあたって、文献を読んだり、先行の研究からテーマを考えるのではなく、できたら身の回りの言語使用状況を興味を持って観察し、課題を見出し、そこに何らかの貢献ができるような研究を行いたいと考える。（学部生F 日本人女性）

(4) 研究と教育は一体

記述例(9)	JF先生の「研究と教育が分かれることは考えられない」という考え方は忘れてはならないと思った。研究の道に行つたとしても教育現場に入ったとしても、研究で分かったことを現場に生かし、現場で起こつた新たな問題を研究するという相互の関係を常に持ちたい。（学部生G 日本人女性）
--------	---

②言語研究の内容

(1) 談話レベルの研究の重要性

記述例(10)	談話レベルの研究の必要性もJF先生のインタビューより気付いた点の一つです。JF先生は例えば「は」と「が」の違いなどは結局それが使われる場面、つまり談話の実例を見なければならぬとおっしゃっており、さらに「だって、人間は話しているわけだから」という言葉からは、日頃は教科書を相手にしていても最終的には学習者は皆習ったことを実際に使用する場面に回帰するわけであり、その点からも学習者のための談話レベルの研究は不可欠であるということが分かりました。（学部生E 日本人女性）
記述例(11)	JF先生は談話レベルでの研究の必要性をインタビューの中で、また論文の中で論じているが、やはり、日本語は談話の中で様々に形を変える言語だと感じる。それぞれの文法や単語のみの研究では、生のコミュニケーションの中で本当の日本語の機能までを対象としないのではないかと思った。いざ、自分で日本語を研究するといった場合には、現在とっているこの会話データ分析のように、「流れ」の中での日本語を研究対象としたい。また、自分はSLAゼミに所属しているので、談話形式での言語教育にも関心が湧いた。（学部生A 日本人男性）

③日本語教育の内容

(1) 教材の内容

記述例(12)	「どのような目的で」「誰のために」「何の技能に焦点を当てて」作成するかによって教科書の内容が大きく変わってくるということをこのインタビューを通して学び、実際に日本語の教科書をいくつか比較してみたと思った。（学部生D 日本人女性）
---------	--

④研究者の姿勢

(1) 研究を追求する姿勢

記述例(13)	知りたいと思って始めた研究を一つの結果が得られただけでやめず、それを様々な角度から深く考え、さらに追究していく姿勢に共感した。（学部生C 日本人女性）
記述例(14)	教育現場を持っていない今でも学会や研究会に足を運び、広い視野を持って学びを追求し続ける姿勢は今後の自分のキャリア形成で見習っていききたい点である。（学部生C 日本人女性）

(2) 知見の共有の重要性

記述例(15)	「黙っているより何か言った方がいいんじゃない？何か持っていれば、それを他の人にあげた方がいいでしょ？」については、心強く感じられている。確かに、自分のことを他の人に共有し合っ分ち合うことの思いやりや気遣いがまさに一種の社会的な貢献だと考えられる。(学部生H 中国人男性)
---------	---

⑤日本語教師の姿勢・役割

(1) 教育者の専門性・知識の必要性

記述例(16)	自分がやりたいことをやる、そしてそのことについて専門性を高めることを先生のインタビューから得ることができた。そして自分の言語感覚をちゃんと持つことも私もこれからそれを意識して頑張っていきたいと思う。(学部生I インドネシア人女性)
---------	---

⑥キャリア形成

(1) 世界に目を向ける重要性

記述例(17)	先生の「社会は世界」という言葉は様々な研究を通した先生の視野の広さや深さを物語っていると感じた。(学部生A 日本人男性)
---------	--

以上の学部生のレポート記述から、JF 氏の語りの読み物を読むことで、学部生が様々な学びを得ていたことが分かる。まず、「研究の成果を自らの実践に活かすこと」については、試行錯誤しながらも研究成果を教育現場に活かしていくことの重要性を学んでいた。特に、JF 氏が述べる「研究は即実践」という言葉から、研究や教育という範囲にとどまらず、日常生活でも自身が得た知識をすぐに役立てるべきであるということ学んでいた。また、「教える実践現場で得た経験を研究に活かすこと」、「研究を通して社会貢献することの重要性」「研究と教育は一体」について学び、自身の研究課題の設定の仕方や研究のやりがいというものを考える指標となったと思われる。さらに、言語研究や日本語教育の内容を学ぶだけでなく、「研究の追求」をしつつ得られた「知見の共有」を行う研究者の姿勢、および、「教育者の専門性・知識の必要性」も学んでいた。こうした「研究と実践の連携」の姿勢は、学部生の直近の課題である卒業論文執筆など、狭い意味での研究や、それを活かした日本語教育を行う際の参考になるだけに留まらない。さらに、自身の得た知見を生活で役立て、人と共有していく姿勢、そして世界に目を向け、そうした姿勢を世界的な貢献に活かしていくべきだという人生の教訓を得て、今後、自身がキャリア形成を行っていく上での道しるべとなったとも言えよう。これらの結果をもとに、学部生教育において、先達の教育者・研究者の語りに触れ、自身の今後の研究や実践への取り組み姿勢を考えさせることの可能性が見て取れると考えられる。

5. 「会話データ分析とその研究成果の活用」モデル (大場)

表2「会話データ分析とその研究成果の活用」モデル (中井他 2017) は、12 人の語りにおける会話データ分析の「研究と実践の連携」の具体例から帰納的に抽出したものである。インタビューで全ての研究と実践の事例を聞き出せたわけではないので、網羅的なリストではないが、実際の具体例に基づいて作成された実証的なリストである。

表2は、「会話データ分析とその研究成果の活用」として、大きく【会話データ分析】【研究成果の整理】【実践現場での活用】の3つに分類され、それぞれ下位項目がある。以下、KF 氏の事例を例にあげながら各項目について述べる。

表2「会話データ分析とその研究成果の活用」モデル (中井他 2017:252)

【会話データ分析】	①言語の現象を探る ②研究成果をさまざまな人に伝える
【研究成果の整理】	①理論構築・提案・見直し ②多くの研究をまとめる
【実践現場での活用】	①日本語教育 ②教育者・研究者の養成 ③社会・実践現場に成果を公開・還元する ④世界とつながる

まず、【会話データ分析】の「①言語の現象を探る」は、日本語と韓国語の敬語の研究を行うことが該当する。そして、「②研究成果をさまざまな人に伝える」は、日本語と韓国語の敬語の研究成果を論文や書籍で発表することが該当する。

次に、【研究成果の整理】の「①理論構築・提案・見直し」は、日本語の敬語について歴史的観点から博士論文としてまとめ、さらに現代語のデータをもとに研究を行い、日韓の敬語行動の違いを体系的にまとめ直している。そして、「②多くの研究をまとめる」は、膨大な研究成果を多くの人と叢書としてまとめ上げたことが該当する。

最後に、【実践現場での活用】の「①日本語教育」は、日韓の言語行動の研究から明らかになった日韓の文化の違いを漫画やコラムなどで分かりやすく伝えようとした高校の日本語教科書の執筆が該当する。そして、「②教育者・研究者の養成」は、韓国の大学における指導が該当する。KF氏がドラマの会話データを分析する過程で、韓国の大学の学生もドラマをデータに研究を行っている。さらに、「③社会・実践現場に成果を公開・還元する」は、一般向けの書籍を日本と韓国で出版してきたことが該当する。「④世界とつながる」は、日韓の言語行動に関する研究成果を広く発信し、日韓の架け橋になるような活動が該当する。

本モデルにより、会話データ分析とその研究成果の活用に関して、3つの段階でどのように研究成果を活用し、社会に貢献させていけるか具体的なイメージを持つことが可能となると考える。また、既に研究成果を社会に還元してきている研究者や教育者も、それが表2の「会話データ分析とその研究成果の活用」モデルの中のどこに位置するのか、他にどのような社会貢献の可能性があるのかを検討することによって、「研究と実践の連携」の幅を広げていけるであろう。また、本モデルは実例から抽出したものであるが、これが完成したモデルというわけではなく、今後、多くの研究者や教育者が自身の「研究と実践の連携」の実例を出し合っていくことで、本モデルもさらに改変されていく可能性がある。

6. 全体討論・まとめ (中井)

最後に、本ワークショップの内容についての質疑応答を行い、参加者の世代間、分野間での縦と横の視野の広がりについて感想を共有する。以上、本ワークショップは、グループや全体でのディスカッションの時間を十分取った参加型にすることによって、フロア参加者が会話データ分析とその研究成果の活用について考え、今後の自身の研究内容や実践とのつながりに対する視点を広げる機会となることを目指す。さらに、授業で先達の語りを教材とすることの今後の可能性についても検討したい。

謝辞 本研究は、平成 25～27 年度科学研究費（基盤研究(C)）「会話データ分析の活用法の研究—『研究と実践の連携』のための教員養成用の教材開発—」（課題番号：25370581、研究代表者：中井陽子）の研究成果の一部である。さらに、平成 28～30 年度科学研究費（基盤研究(C)）「会話データ分析の手法を用いたインターアクション能力育成のための教材開発」（課題番号：16K02800、研究代表者：中井陽子）の助成を受けて、引き続き研究を行っている。本研究にご協力くださった皆さまに厚くお礼を申し上げます。

参考文献

- 中井陽子 (2012). インターアクション能力を育てる日本語の会話教育 ひつじ書房
- 中井陽子 (2017). 6. 発表⑤: 教員養成コースの授業報告 中井陽子・大場美和子・宮崎七湖・尹智鉉「日米豪韓における「会話データ分析」の研究成果と教育現場への活かし方を探る—文献調査とインタビュー調査をもとに—日本語教育学会秋季大会予稿集, 70-71.
- 中井陽子 (2018). 会話データ分析を行う韓国の教育者・研究者の語りからの学び—日本の学部・大学院生のレポートの分析から— 韓国日語教育学会 2018 年度第 33 回国際学術大会, 86-90.
- 中井陽子 (編著)・大場美和子・寅丸真澄・増田将伸・宮崎七湖・尹智鉉 (著) (2017). 文献・インタビュー調査から学ぶ会話データ分析ハンドブック—研究から実践まで— ナカニシヤ出版
- 中井陽子・高田光嗣 (2017). 大学院の授業における「研究と実践の連携」を考える機会の試み—ピアリーディング活動を通じた学び— 日本語教育研究, 40, 63-81.
http://www.kaje.or.kr/html/sub04_01.asp
http://210.101.116.36/JournalSearch/ISS_Detail.asp?key=3543771&tname=kiss2002